



絵筆と指揮棒が 紡ぎ出した異才たち

― 豊橋市の一公立中学校に赴任した二人の
若き熱血教師と団塊世代生徒たちとの生涯交流録 ―

市民の誇り「豊橋交響楽団」と
地域心臓医療の要「豊橋ハートセンター」はここから生まれた

山本 伸也

この物語は、筆者の豊橋市立羽田中学校時代の思い出をもとに

書かれたフィクションである。

はじめに

大学入学以降、故郷を離れ各地を転々。現在、横浜に住んでいる。幸いなことに定年退職後、名古屋、浜松、静岡へ定期的に通う仕事を依頼され、故郷豊橋へ帰る機会が増えた。半世紀に及ぶ長き不在にもかかわらず、友人、知人たちが温かく迎え入れてくれ、交流が復活。また、新しい人々とも知り合うことが出来、もはや故郷での時間は第二の人生を生きていくうえでかけがえのない心の支えとなっている。まさに「故郷はありがたきかな」である。

三十年ほど前、多くの企業が東京への一極集中を進めるなか、ドイツを代表する自動車メーカー・フォルクスワーゲンの日本法人が本社を東京から豊橋へ移し、大きな話題になった。

数年後、ある集まりで豊橋へ引越してきたばかりの、東京以外の地に初めて住むという社員と話したことがある。私が当地出身と自己紹介すると、彼が、「豊橋という町は、他所^{よそもの}者をなかなか受け入れてくれない排他的な土地柄らしいですね」

と不安げにたずねてきた。意外な言葉に思わず

「この町は旧東海道時代から交通の要所で、頻繁な人の出入りが当たり前の土地柄ですので他所^{よそ}からの移住者を温かく迎え入れてきた町だと、私は信じています。何故、そう思われるのですか」

郷土愛むき出しで応えた。

「同僚に、子供の頃に一家で他の町からこの地へ移り住んだ者がいるのですが、二十年以上経った現在も、家族が近所から『旅の人』と呼ばれていると嘆いていました」